

授業のヒント

テーマ

談話構成を意識して話そう(2)

～中級編～

ちゅうきゅうへん

目的 もくてき
・ 談話構成を意識して経験談が話せるようになる。 だん わ こうせい いしき けいけんたん はな
学習者のタイプ がくしゅうしゃ
・ 中～中上級 ちゅう ちゅうじょうきゅう
クラスの人数 にんずう
・ 何人でも なんにん
準備するもの じゅんび
・ テープ、テープレコーダー、録音用マイク ろくおんよう

◆中級の話す能力

ちゅうきゅう はな のうりよく

中級のレベルでは、一通り学習し終えた初級の文法を使って話せるようになることが学習の目標の一つになります。既習の文法項目をどのようにひとまとまりの談話の中で使うかということに注目させることが大切です。さらに、自分の力で談話の構造を考えながら組み立てていけるようになる能力を育てることも必要です。また、話す相手や状況によって、文体(丁寧体と普通体)を変える社会言語学的能力を育てていくことも必要でしょう。

今回はその一つの手段として、経験談を取り上げます。その理由として、経験談は談話の構造がはっきりしているため、構造を意識しやすいたということが挙げられます。また、経験談は、フォーマルなスピーチにも親しい人とのインフォーマルな会話にもよく登場しますから、談話構成を意識した話を練習するのにぴったりです。みなさんの生活を振り返ってみてください。日常生活で自分の身の回りに起こった出来事や体験を、親しい日本人の友人や日本語の先生に話したくありませんか。

◆活動の手順

かつ どう て じゅん

初級ではモデルの提示から始めることがほとんどですが、中級以降の場合、既習項目を使って表現することができるようになっているので、与えられたタスクの発表から先に行なうという方法が用いられるようになります。

スピーチを行うために重要な「談話構成」をどのように把握させるかのヒントを紹介し

ます。(タスク先行型)。それには、次のようなステップが考えられます。

＜タスク先行型の活動の手順＞

せんこうがた かつどう て じゅん

ステップ1：1分くらいで話せる経験談を考えてくるように指示する。必要に応じて教師が自分の経験談を話す。

ステップ2：クラスで自分の経験談を話す(録音)。

ステップ3：録音の書き起こし(トランスクリプションの作成)

ステップ4：モデルとなる経験談をいくつか提示し、教師の指示のもと、その談話構成を分析する。

ステップ5：モデルの談話構成と自分の話を比較する。問題となる部分を自分で訂正する。

ステップ6：教師は学習者に共通して見られる文法項目の間違いをクラスで復習し、学習者に自分の間違いに気づかせる。

ステップ7：学習したことに気をつけて、なめらかに話せるよう原稿を見ずに練習する。

ステップ8：もう一度同じ経験談を話す。

まず、ステップ1では、自分の体験から困ったことや面白かったこと、忘れられない思い出など、一つの話題を選んで1分程度の短い経験談を考えてくるように言います。経験談がどのようなものかがわからない学習者がいる場合は、教師が自分の面白い経験談を試してみたいでしょう。学習者には、経験談のアウトラインは書いてもいいが、原稿を全て書いてそれを丸暗記するような準備はしないように言います。

ステップ2では、床に座るなどできるだけリラックスした状態で、クラスメイトに経験談を披露します。この時、話を録音します(インフォーマルな場での経験談)。

ステップ3では、宿題として録音したテープを自分で聞き、全てを書き起こしてくるよう指示します。これは、談話構成を意識したり、自分の話し方を振り返ったりするのに必要な作業です。話の展開がよくわかるように発話の区切れごとに書き起こすように指示します。その際、次のようなトランスクリプションの例を示すとよいでしょう。

(トランスクリプション例)

1)	これは、私がスキーに行ったときに失敗した話 なんだけど。
2)	もう10年ぐらい前かな。
3)	私は、それまでスキーに行ったことがなかった のね。
4)	それで、友達にスキーに行こうと誘われて、
5)	とても楽しみにして行ったの。
6)	それで、スキー場に着いて、
7)	まず、リフト券を買って、
8)	2人乗りのリフトに友達と乗ろうとしたんだ。
9)	そしたら、私は、リフトにうまく乗れなくて、 体が横に倒れちゃったのね。
10)	で、そのとき、私のストックが横に座った友達 のお尻の下に入っちゃったの。
11)	それで、そのストックを取ろうと思って私、 引っ張ったのね。
12)	そしたら、その友達がリフトから落ちちゃった んだ。
13)	あの時は本当に友達にすまなかったなあと思 も思う。

提出された学習者のトランスクリプションについて、
教師は次の3点をチェックします。

①談話構造

経験談は、基本的に a) 話の概要の説明→b) 登場
人物・状況の説明→c) 実際の出来事→d) 出来事
に対する評価、という流れで構成されています。そ
の流れに沿っているか、チェックしましょう。

②話の展開部分とそこに使用される文法

実際に起こった出来事を描写する部分には、話が盛
り上がる部分がいくつか見られます。そこでは「～
たら／そしたら」「～ちゃう」、受け身、引用、「の/
んだ／んです」が現れることが多いので、学習者の
話の中にもそれらが効果的に使われているかチェッ
クしましょう。

③話のまとめりやつながり (結束性)

主語の「は」と「が」、文脈指示の「この」「その」
の使い分けや、文と文をつなぐ接続詞や副詞などが
適切に使われているかをみましょう。

次のステップ4では、学習者にモデルとなる経験談を
分析させましょう。まず、学習者に上記のようなモデル
となる経験談のトランスクリプションを見せながら話

を一度聞かせます。そして、その話の構成に注目させま
す。まず、前述の①談話構造にある a) から d) の4つ
の部分に分けさせてみましょう。ただし、話によっては
c) と d) しかない場合もあります。左の例では、1)
が a) 話の概要部分、2)～3) が b) 状況説明の部分、
4)～12) が c) 実際の出来事が動いていく部分、そし
て、13) が d) 出来事に対する評価部分になります。

そして、特に c) 実際の出来事が動いていく部分に注
目させその中で話が盛り上がっている部分に、どのよう
な文法が使われているかを学習者に挙げてもらいます。
左の例では、9) 10) と 12) が盛り上がっている部分
になりますが、他の部分と比較してみると「そしたら」
「ちゃった」「の／んだ」が使われていることがわかりま
す。分析の時に重要なのは、学習者に気づかせるように
することです。学習者自身が発見したことを学習につな
げる経験を積むことは、習得の促進や自律的な学習態度
の養成にもつながります。

ステップ5では、モデル例の分析結果をもとに、各自
の最初の話を振り返り、どこをどう直せばいいかを考え
ます。自分の話の盛り上がっている部分がどこかも考え
ながら、盛り上がりふさわしい文法を意識的に使用する
よう促します。続くステップ6では、教師は学習者に
共通する間違いをまとめて全体で復習する機会を設けま
す。学習者には復習後、自分のトランスクリプションを
見てその間違いを訂正させます。ステップ7では、学習
したことに気をつけながら滑らかに話す練習をします。

このように、談話構造を意識して自分の話した経験談
を直し、最後になめらかに話せるようになる練習をした
ら、最後の活動として(ステップ8)、練り直した経験
談をもう一度披露してみましょう。この時、外から日本
人のゲストを呼ぶと、話す相手も状況も違う発表となる
ので、同じ話でもより新鮮で有意義な披露の場となる
と思います。また、初対面の相手なので文体を換えて話す
練習にもなるでしょう。

普通体の会話が初めての学習者には、丁寧体の発表を
先にするとういでしょう。

参考文献

- 「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析—雑談の場
での経験談の談話指導に向けて」木田真理・小玉安恵 (2001)
日本語国際センター紀要11号
- 「中級入門期におけるディスコース組み立て練習の実践」
(2001) 田頭直美 岡山大学留学生センター紀要8号

このコーナーの担当者：小玉安恵、阿部洋子 (日本語国際センター専任講師)
読者の皆さんからのアイディア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。